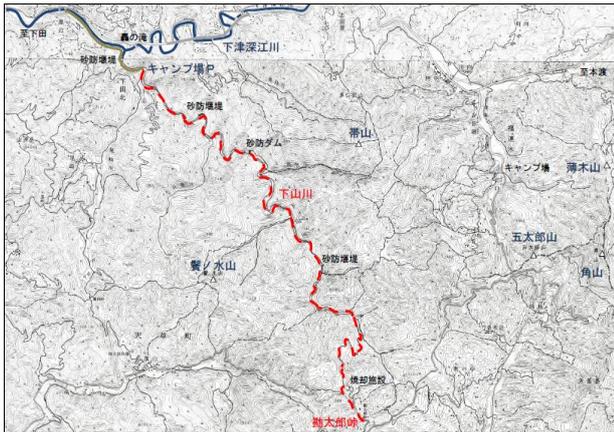


下津深江川水系下山川から勘太郎峠



下津深江川轟の滝



林道沿いのタカサゴユリ



下山川中流の渓谷



H18.8.20(日)晴後一時俄雨 12名参加

1号車-Im、Tr、O、Tn

2号車-Ky、Uh、Ty、Ha

3号車-Ih、Ht、Y、N

□タイム 8:02 天草市役所発,8:35 轟の滝公園,8:45 轟キャンプ場 P,8:52 出発,9:40 砂防ダム,11:15 桁山橋右折 12:08 勘太郎峠(弁当),13:00 下山開始,14:05 岩の上集合写真-俄雨,15:20P 着,16:20 本渡解散 参加費 300円

□市役所に12名が集まり車3台で出発する。轟の滝公園から大水車を見下ろすと台風10号による雨のため水嵩が増えている。轟キャンプ場駐車場に車を止め歩き始めた。

下山川(したやまかわ)の対岸にキャンプ場があるが人気がない。刈り取られたばかりの稲田に農作業の人が三四人。右奥に上水道施設があり、左側に下山川の清流を見ながら歩く。砂防堰堤を二つ過ぎると右から七兵衛川が流入し橋を渡る。このあたりの川幅は割と広く小滝と釜が綺麗だ。やがて大きな砂防ダムがありダム湖ができていた。サシバが鳴き、オトコエシ、タカサゴユリ、ウバユリ、ホトトギス、ミズヒキなどの植物が見られた。道は清流の近くへ戻り、日陰が続くため気持ちが良い。橋を三つ過ぎ、桁山住居跡の橋を右へ渡る。ここから急な林道の登りで廃屋や炭窯がある。コンクリート舗装された道を歩き高浜線の車道に出た。左側に焼却施設が有り高浜皿山へ通じる道と合流する。勘太郎峠は車道の最高点で写真を撮る。少し引き返し日陰を探して弁当を食べる。

帰途砂防ダムを過ぎて清流の大岩で集合写真を撮る。その直後急に暗くなり俄雨が降り出した。雨具を着る間に皆全身ずぶ濡れになり駐車場に着き、談笑してスイカを食べた。
■御林の歴史 尾上正彦著「檜柄木拍子木のふるさと 檜の林の物語(熊本県立図書館蔵)」によれば、御林は「角山」とその北側に連なる「薄木山」、黒仁田山峰続きの「帯山」の三山とされる。「帯山御林絵図」の中央に下山

勘太郎峠にて



下山川溪谷上流



下山川溪谷清流の大岩にて



帯山御林絵図(文献②法橋幽墨筆)



川が描かれていると見受けられる。江戸時代徳川将軍家の槍柄木はこの林の檜（ハナガガシ）に限られていて、厳しく監視、取締りが行われていた。最初の伐出しは万治元年(1658)で、以後文久3年(1863)までの205年間にわたる記録が残されているという。また、歌舞伎の拍子木（シラカシ）としても珍重されていた。

貴重な植物も多く、天草寒欄、春欄、えびね、フクレギンダ、アマクサシダなどの自生地であるが愛好者の乱獲に遭っている。

■登山の歴史 角山を訪れた登山家の一人に植物学者の竹内亮（たけのうちまこと 1894-1982）氏がいる。竹内氏は昭和6年前後三度にわたり天草島を訪れて白嶽周辺、次郎丸嶽、老嶽、倉岳、角山、矢筈嶽、柱嶽などの山々に登り、昭和7年発行の日本山岳会会報『山岳第27年2号』に「天草島の山々」と題して登山報告を行っている。

今西錦司（いまにしきんじ 1902-1992）氏は、「全国千五百座登頂」の途上、昭和56年1月31日から2月2日にかけて三角岳、天竺、角山、柱岳、権現山、倉岳、大岳の山々に登られた。今西氏はマナスル遠征一次隊隊長や日本山岳会会長さらに岐阜大学学長を務めた民俗学者で探検家である。

向一陽（むこういちよう 1935-）氏は、「山と溪谷 1996年10月号」に「天草下島天竺—誰も知らない最高峰」と題して離島の山シリーズの最初に角山と天竺、荒尾岳に登った紀行文を環境問題の側面から書いておられる。後に下記の単行本が発行された。

■勘太郎峠の名称由来については調査中です。

[参考文献]

- ① ,竹内亮 天草島の山々 山岳第27年2号 (日本山岳会)
- ② ,尾上正彦 槍柄木拍子木のふるさと檜の林の物語 S50 (熊本県立図書館蔵)
- ③ ,向一陽 島のとっぺんから島を見る (山と溪谷社) (天草山岳会 N)